

岩崎早生(いわさきわせ)

育成者：岩崎伝一（長崎県西彼杵郡
西海町中浦南郷）

来歴：「興津早生」の枝変り

特性

「岩崎早生」のデビューは華々しかった。発生地の中長崎県大西海農協が生産態勢を整え適当な量に達して初めて出荷したのだが、乾燥した気象条件に恵まれ、高品質の果実が東京市場にお目見得し、関係者の耳目を驚かせた。種苗法による品種登録は行っていない。

■栽培特性

樹姿はやや立ち気味で、樹勢は極早生の中では強い方である。葉は「興津早生」に比べて細長く、先端が尖り気味である。節間は短く、枝は密生しやすい。幼木時や高接ぎ初期には枝は旺盛に伸長する。しかし、結実し始めると生長がにぶり、葉の小さい小枝が密生するようになるので、枝の間引きや側枝の切り返しなどにより充実した結果母枝を確保するようにする。

■果実特性

熟期は「宮本早生」とほぼ同じである。果径指数は140前後だから、「宮本早生」や「山川早生」と同類の偏平系といえる。9月中旬から着色を開始し、10月上旬には果頂部から濃橙紅色に色づき、10月中旬の完全着色時には他の極早生よりも濃色になる。果面も滑らかで美しい。

9月下旬に酸は1%前後になるが糖度は9～10度で十分とはいえない。10月上中旬にはほぼ完全着色し、酸も1%以下となり、糖度も11度近くなるので、この頃が収穫期と思われる。浮き皮は10月下旬頃から現れ始めるが、これには晩夏から初秋にかけての降雨の影響が強い。乾燥した年には、浮き皮の発生はほとんどなく、10月下旬から11月上旬まで樹上に置けば、糖度は12度以上となり、果肉は柔軟さを増し、じょうのうは薄くなって、極めて高品質の果実となる。

■地域適応性

本種の栽培は発生地の中長崎県で500haを越え、熊本、佐賀、和歌山、愛媛などで増植されている。九州南部の高温な早出し地帯では、着色の遅れや浮き皮の発症などが心配され、濃色で糖度の高い本種の特長が発揮されにくいと思われる。増植されている中長崎県を初め上記のような比較的温暖な温州ミカン地帯が本種の適地であろう。

■問題点と対応策

乾燥しにくい水田転作園はもちろん、傾斜地でも雨が多い年には、糖含量が上昇せず減酸も早く進んで味ぼけになりやすく、浮き皮も発生しやすいので注意しなければならない。乾燥を促すための、高うねや溝掘り、ポリマルチ等の工夫が大切である。

(岩政正男)